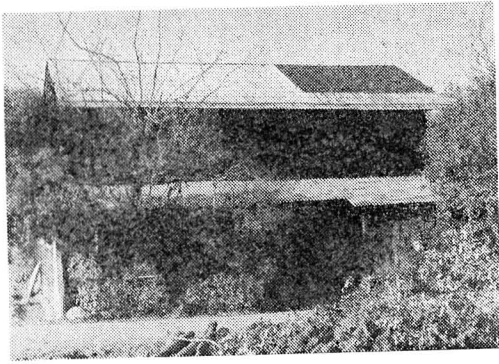


## 透谷の希望の故郷

自分より四歳若い友人島崎藤村に、一生涯にわたって消すことができないほどの強い感化をあたえて自殺していった明治の詩人北村透谷。その透谷が死んで、すでに九十周年になる。この人と多摩とのゆかりは深い。最近は、かれの一生を描いた藤村の作品『春』や『透谷選集』を手にして、多摩を訪れる人をよく見かける。

北村門太郎・透谷は明治元年（一八六八）、小田原に生まれたが、小田原はかれにとって偶然の故郷にすぎない。多摩こそが「わが希望の故郷」だとかれは記している。なぜなら、透谷は多摩にはいつてはじめて純愛の人を得、親友を得、明治の民権革命の嵐に身を投げこみ、挫折し、そして自分の真の探究のテーマにめざめたからである。そのかれのすべての青春放浪、原体験の想い出が多摩の山野にはこめられている。

透谷が多摩に足をふみ入れたのは、明治十五、六年ころ、かれが横浜の県議会で石坂昌孝ら自由民権運動の指導者と親しくなっただけであらう。早熟な少年であった透谷は、そのころすでに八王子町の料亭萬林や角喜（現存）などにも現れていたという。明治十六年には単身で富士登山しているが、その途中、川口村（現八王子市上川町）の豪農秋山國三郎宅を訪問。さらに十七年冬から翌年



ありし日の秋山家の旅館（川口村）

春にかけては秋山宅に寄留していた親友大矢正夫を訪ね、秋山と三人で数ヵ月間、生活を共にしている。十年ほど前まで、その旅人宿風の家がそっくり残っていたのだが、今はとりこわされて影も形もない。しかし、その間の生活ぶりは透谷の「三日幻境」にくわしく書き残された。そのころかれは大矢と連れだつてさかんに網代鉱泉や五日市の秋川辺を跋渉したらしい。五日市憲法の起草者千葉卓三郎は十六年にすでに病死していたが、同志の深沢権八や内山安兵衛はまだ活躍していたし、透谷もかれらと逢っていたにちがいない。このころ、五日市の勸能学校の助教をしていた秋山文太郎が、後に透谷の印象を伝えている。

大矢正夫は男まえが良いといって村の娘たちにさわがれていたが、北村透谷の方はさっぱりだった。そのかわり、かれはいつも外国の本などを懐中にしていて、他の壯士などがあばれているときでも、黙って読書に耽っているといたったような青年だった、と。

だが、こうした透谷たち三人の幻境生活はたちまちにして崩れた。政府の激しい弾圧に怒った自由党員の武装蜂起があいついで起こり、大矢もついに大阪事件の陰謀に加盟、透谷にも同行を迫った。いっぽう、秋山國三郎は地元の川口困民

党騒擾事件の後しまつのため奔走、透谷は同志への裏切りなどに悩みぬいたあげく、頭を剃って許しを乞うという姿になり、政治運動から脱落した。

この精神的な痛手からかれが立ち直るのは三年後の明治二十一年だが、その時、鶴川村（現町田市野津田町）の石坂邸から鎌倉古道を歩いて百草園の春をたずねている。石坂美那子との結婚の日も近く、透谷の一生中、もっとも楽しいひとときであったろう。百草園には明治二十五年にも再遊しているが、この時は秋山国三郎や出獄後の大矢正夫との七年ぶりの同行であった。だが、それが最後になったわけで、透谷はそれから二年後にはもうこの世にはいなかった。かれが縊死したのは今、東京タワーが立っている芝公園の林の中である。

（色川大吉）

\* 透谷のいわゆる「幻境の里」南多摩郡川口村へは、国鉄八王子駅北口から五日市、川口方面行きバスに乗り、上川町森下のバス停で下車されるとよい。左手に川口川が流れており、公民館があるが、その道向こう右手に透谷、大矢たちが起居した旅宿があった。そこには景山英子も訪ねている。国三郎の墓はこの部落に立派に残っているが、豪壮を誇った秋山の当時の居宅はない。わずかにその邸の一部が川口町（旧下川口村）の米山邸として移築されているのみである。最近、秋山国三郎については、その遺稿句集「安久多草紙」の全文を復刻し、すぐれた研究論文を取めた小沢勝美著『透谷と秋山国三郎』自費出版、昭和四十九年（八王子市上菅分町三五三ノ六〇小沢方）があるので参照されたい。

現町田市野津田町の丸山には、石坂昌孝の生家が残っており、透谷が訪ねた山河のおもかげも少しばれる。その丸山の丘に堂々たる石坂昌孝碑があるのだが、訪ねる人は少ない。

〈参考文献〉色川大吉『新編明治精神史』（中央公論社）。『北村透谷選集』（山根波書店、文庫版）。

## 聖瑪利亞教会

十五、六歳の少年の時であった。今から二十数年前のことである。元八王子村の福岡（現八王子市）というところに偶然足をふみ入れた時、屋根の先が鋭く上がったゴシック型の教会に出くわし、その時受けた奇異な感じを私は忘れることができない。今にして思えば、そこには農村と教会というコントラストに、明治のキリスト教の歴史が見事に浮き彫りにされていたのである。

この福岡にキリスト教を引き入れたのは、山上卓樹と山口重兵衛という二人の青年であった。かれらは商用でしばしば横浜を往復していた。横浜は、山村地帯で生産された生糸の輸出港であると同時に、キリスト教の拠点でもあった。二人はそこでカトリックに遭遇した。とりわけ山上卓樹は、明治のはじめに青雲の志を抱いて東京に遊学し同人社に学んだ。同校は、当時慶応義塾と並び称され、経営者の中村敬宇は、明治六年（一八七三）、日本の最高の知識人でつくられた明六社の一員で、早くからキリスト教の洗礼を受けていた。このことは山上をキリスト教にひきつけるひとつのきっかけになった。

明治十年（一八七七）五月、二人は福岡に「横浜耶穌天主堂分社」を設立した。すでに横浜からはフランス人の宣教師たちが足しげく福岡に往来していた。宣教師たちは、ここを多摩のカトリック